

ひとりごと

「ファイティン」

1歳8カ月の娘は、毎朝「ファイティン」という言葉とハイタッチで私を仕事へと送り出す。ファイティンとは、韓国語で「頑張れ」を意味するが、妻が玄関先でその言葉を掛ける様子を見ていた娘は、いとも簡単に会得し、学びの成果を披露することが日課となった。意欲的に何かを学び、成長しようとする子どもの姿は、研修生として文部科学省に身を置いている私に奮起を促してくれる。

これまで県の行政職員として、学校、教育委員会、知事部局での勤務を経験し、教職員の給与・サービス管理、学校運営への参画、県立学校の運営費等の予算編成、若年者の就業支援など様々な業務に携わらせてもらった。人間関係にも恵まれ、尊敬する上司や先輩、苦楽をともにし、支え合える仲間にも巡り会えた。そんな順風満帆な公務員生活を歩んできたはずなのだが、なぜか仕事に対する自信と情熱が年々希薄しているように感じた。「果たして自分の仕事が見童生徒のためになっているのだろうか…。」そう反芻する日が多くなっていったからである。

だが、変わるチャンスは、急に訪れた。文部科学省への派遣研修の声が掛かったのである。娘の育児の心配もあり、すぐに答えは出せなかったが、仕事に対する自信と情熱を取り戻したく挑戦することを決意した。

あれから1年。密度の濃い研修生活は、自信を喪失する間もないほど慌ただしく過ぎて行く。未だかつて経験した事のない業務スピードとスケールに圧倒され続ける毎日だが、仕事への向き合い方と熱意は確実に変化した。それは、全国の子どもたちや教職員、教育委員会を想い、情熱を持って真摯に職務を全うする文部科学省の行政官と各自治体から集まった割愛・研修生と出会えたからに他ならない。ある行政官は私にこのような話をしてくれた。「教育行政は、学校、市町村、都道府県、そして国とそれぞれが当事者意識を持って役割を果たして、補い合うことで力を発揮する。」と。それまで、当事者意識の低かった私には、その言葉が胸に響き、改過自新の契機となった。

もうすぐ、研修期間が終わってしまう。貴重な派遣研修の機会を与えてくれた県教育委員会、挑戦する勇気を与えてくれた家族、お世話になった文部科学省職員、割愛・研修生の方々には、この場を借りて感謝申し上げたい。そして、これからは、文部科学省で培った経験や知識を活かし、教育行政職員の責任と使命の大きさを自覚しながら、今そして未来の子どもたちのために汗をかいていきたい。

「さあ、今日も仕事へと向かうとするか…。」

「行ってきます!」

「ファイティン!」

(Y.U)

「教育委員会月報 令和7年4月号 No.906」

- ・発行・著作 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課
- ・〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
- ・TEL : 03-5253-4111 (代表)
- ・URL : <https://www.mext.go.jp>



文部科学省